

岡山大学病院精神科リエゾンチームによる WEBを用いた個別症例に対する スーパーバイズ・システムの実現と普及について

井上 真一郎 ●岡山大学病院 精神科神経科 助教



リエゾンチーム集合写真

1. 背景と目的

高齢者人口が急激に増加している地域では、一般病院の入院患者も高齢化しているため、医療者は高齢者によくみられる認知症やせん妄、うつ病などの精神疾患に遭遇する機会が多い。ただし、全国的に一般病院のわずか1割程度にしか常勤精神科医が配置されていないという現状があり、実際には非専門家が手探りで精神科治療やケアを行っている。このことは、地域における一般病院の医療者にとってはもちろんのこと、患者にとってもきわめて大きなデメリットである。

そこで本活動では、高齢化が進んだ地域の一般病院において、院内に精神科医が不在であるため認知症やせん妄などに対する精神科治療やケアに難渋しているケースについて、長年にわたって多職種によるリエゾン活動を行ってきた当院精神科リエゾンチームがWEBを用いて個別にコンサルトを受け、アセスメントや薬物治療、対応方法などについて具体的なスーパーバイズ(指導・助言)を行うシステムを構築したい。

2. 取り組みの方法

県内の高齢化が進んだ地域の一般病院と連携し、WEBで医療者同士が相談できる体制をつくる。その上で、曜日や時間帯を決め(例:月・水・金の16-17時)、精神科治療やケアに難渋しているケースがあれば、予め個人情報に十分注意しながら患者情報を紙ベースで受け取る。それに対して多職種の強みを活かし、またこれまでの診療経験を踏まえて、当院精神科リエゾンチームで実践的・効果的な対応について検討を行う。そして、WEBで具体的なスーパーバイズや双方向のやり取りを行う。

3. 期待される成果

本活動によって、患者の症状改善につながるだけでなく、その病院に標準的な精神科治療やケアが根付き、医療者の知識定着やスキルアップに寄与すると考えられる。そして、当院が行う本活動の内容やプロセスがモデルケースとなり、このシステムが全国に普及すれば、多くの精神科医不在の一般病院にとって大きなメリットになると考えられ、安心・安全な治療・ケアの提供につながる可能性がある。

なお、本システムはWEBが主体であるため、当院精神科リエゾンチームがその病院に出向く必要がなく、往復の移動時間の省略やコストダウンにつながることなどから、実施・普及可能性が高いと考えられるものである。